

韓 国 雑 感

二 瓶 敏

今回は私にとって初めての韓国旅行であったが、着いた早々この国の現実に直面させられた。ソウルの空港からマイクロバスで出た途端に大変な渋滞にまきこまれ、しばらく足止めされたのであるが、聞くところによると毎月行われる防空演習のためであった。韓国は（半ば）戦時体制なのだということをまず体験させられたわけである。その後通った高速道路では、直線コースで中央分離帯を設けていないところがあったが、これは有事の際に軍用機の飛行場として用いるためだとのことであった。かねがね韓国がアジア NIES の雄として発展した条件としてアジア冷戦体制の問題があると考えていたのであるが、軍事対立のことが日常生活にもはっきりと影を落としていることを実感させられた。



工場見学でまず印象深かったのは現代自動車であった。ここでは、組立現場の労働のあり方が日本とは非常に違うことを痛感させられた。ラインの近くに電話ボックスが置いてあって、われわれが近くを通ったとき丁度電話がかかってきたのだが、ラインの労働者がそれを受けて、「○○さーん」といった調子で同僚を呼びに行くのである。もちろんその間作業は放置したままである。分秒を争うようにして働く（働かされる）日本のラインの労働者には考えられないような、のんびりした光景であった。そんな状態にまず驚かされたのだが、さらにラインに沿って見ていくと、労働のテンポが日本よりはるかにゆったりしていることに気がついた。それに、腕組みしたり台の上に頬杖ついたりして作業の来るのを待っている労働者がいるのが目についた。「ライン・バランスがとれていない」ということは事前に聞いていたが、なるほどこういうことを指すのかと納得させられた。（一緒に見学した先生の話によると、検査工程のある労働者は紙飛行機を飛ばして遊んでいたそうである。）紙飛行機は別として、こうしたゆったりした働きぶりは、資本の見地からすれば叩き直さなければならないものであろうが、人間的な労働という見地からすれば別な評価がなされるのではないか。ここには大事な問題があると感じさせられたのである。

この会社で、われわれが今の労働者について質問したところ、対応してくれた管理者は、「今の労働者はエゴイズムで、会社や仕事のことを考えない。5時になると仕事が残っていてもさっさと帰ってしまう。これが一番困る」と語っていた。檀国大学の李奎昌先生は、1987年の民主化以後、労働運動が強くなり、大幅な賃金上昇がもたらされたが、これが韓国産業の輸出競争力を損なっていること、同時にいわゆる 3 K で、つらい労働を忌避する傾向が強

くなっていることを話されたが、現代自動車の経営者もまさにこうした問題で悩まされているのである。上述のラインにおける働きぶりも、こうした労資関係を反映したものであろう。

今年の2月、訪韓に備えて研究会が開かれ、埼玉大学の板垣博氏が「韓国における日本型生産システム」と題する報告をされた。それを聞いて、私は、日本型生産システムが韓国でいかに取り入れられているかという氏の問題意識は、日本的労資関係のあるべき理念型ととらえて、韓国がこれにどこまで近づいてきたかを測るという問題の立て方であって、傲慢さを感じさせるものだと思ったのであるが、韓国の実状（の一端）に触れた今、あらためて、このような問題意識は全く見当はずれであって、労働者が資本のもとに全人格的に従属させられてしまった日本と、労働者が企業帰属意識から自由な韓国との質的相違こそが問題とされなければならない、と考えた次第である。



浦項製鉄所では、まず、「鉄は国家なり 朴正熙」と書かれた額がロビーに掛けられているのが目についた。日本でも、明治期の八幡製鉄所設立から戦時重工業化を経て戦後の高度成長にいたる間、一貫して「鉄は国家なり」というスローガンが叫ばれ続けた。冷戦対抗の最前線に位置し、その中で工業化（重工業化）を進めなければならなかった韓国では、このスローガンはいっそう切実なものがあったに違いない、と感じさせられた。浦項はまさに韓国の八幡なのである。

八幡と同じく、浦項の建設は国家の総力を挙げた事業であったであろう。したがってそこにはエリート中のエリートが集められたに相違ない。ここでわれわれに説明してくれた日本語の達者な若い社員も、エリートの1人であろうが、浦項では韓国の一流大学の出身者が大勢働いていることを、やや自慢げに話していた。彼の話は非常に率直で、われわれの不躰な質問にも誠実に答えてくれたが、特殊鋼は別として普通鋼では日本の製鉄業と肩を並べるところまで来たと、自信のほどを披露してくれた。現代自動車での質問したような労働問題についての質問をしたところ、浦項では労働者の待遇については十分配慮しているので、労働問題で頭を悩ますことはない、との答えであった。大正期以降、八幡では養成工制度を設け、企業忠誠心をもった子飼いの労働者を育成したという経緯があるが、労働問題が重要な焦点となっている今の韓国で、浦項という国家的な意義を担っている製鉄所は、この問題に対してそれなりの対応をしているに違いないと思われたが、そうした機微について窺うことはできなかった。



慶州は韓国の古都で、名所旧跡の多いところであるが、われわれが見物した佛国寺は由緒

ある大きな寺院であった。この寺院の案内書には、豊臣秀吉の朝鮮侵略の際に日本の軍勢によって焼かれたことが書かれてあった。釜山には、港の全景を見渡せる竜頭山公園があるが、ここには秀吉の軍隊を亀甲船で悩ました李舜臣提督の巨大な銅像が建てられていた。日本人が韓国・朝鮮のことを考えるとき、さすがに35年間の植民地支配の歴史はすぐ念頭に浮かべるが、秀吉までさかのぼって日本の侵略の歴史に思いをいたす人は少ないであろう。しかし、韓国人にとってはこのことは心に刻みつけられているのである。このように、善意の日本人でも逃れることのできない加害国民と被害国民との意識のズレというものがあるように思われる。そのことを忘れることはできないと感じたのである。

慶州で、ある料理屋に夕食に行ったときのことである。食事途中にトイレに立って、そのついでに庭に出て池を眺めていた。その庭は外の道路につながっていたのであるが、突然1人のおばあさんがやってきて土産物を買ってくれとせがみ始めた。両手にいっぱい木製のネックレスやキーホルダーを持っていて、ぜひ買ってくれ、2つなら安くする、3つならもっとまける、と言って聞かない。それが実にしつこくて、私がいないと言って帰りかけても、行く手をふさぐようにして迫るのである。私は閉口して、逃げるようにして部屋に戻ったのであるが、同じような物売りは、佛国寺でも、釜山のホテル脇でも出会った。アジアのドラゴンともてはやされた韓国の躍進の陰にある貧困を、かいま見た思いであった。

韓国訪問印象記

加藤 佑治

今回の韓国訪問の旅は、私にとって大変大きな収穫であった。その第一は三星電子、浦項製鉄所、現代自動車という、韓国最大かつ最先進の企業を視察できたことであった。特に三星電子では、生産過程では日本のそれを見なれている私の眼にはむしろ、日本と比較してかなりおこなっているなという印象でやや奇妙な感じすらもったのだが、製品展示場では、日本でも最新の部類に属すると思われる電子製品が数多く陳列されていて、韓国の情報機器の生産も“ここまで来たか”という感を強く持たされると同時に、ああ、日本に相当の競争意識をもっているなと感じた。このことはまた現代自動車の検昌明・技術担当副社長が、案内して下さったバスの中での私の質問に対し「日本への輸出は全く期待していません」と答えられたその口ぶりの中にも、日本自動車産業への警戒心とひじょうな競争意識をもっておられるのを感じた。